

令和元年6月18日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02623

研究課題名（和文）現代モンゴル語における属格主語認可条件の解明に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Elucidation of the Conditions on Genitive Subject Licensing in Modern Mongolian

研究代表者

牧 秀樹 (Maki, Hideki)

岐阜大学・地域科学部・准教授

研究者番号：50345774

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本調査では、モンゴル語における属格主語認可の環境を調査し、次の3点を明らかにした。第一に、移動された名詞句が、その右手にある属格主語を認可できる点。第二に、モンゴル語も日本語も、同じ二つの属格主語認可条件に従い、その二言語の相違は、述語の連体形が出現できる環境の相違に起因している点。第三に、世界の言語には、属格主語認可に関して（少なくとも）2種類の言語がある点。つまり、チャモロ語のような言語においては、疑問文形成によって生ずる一致によって、述語が名詞化され、この名詞化された述語が属格主語を認可するが、モンゴル語のような言語では、属格主語は、名詞化された述語とともに、名詞自体も必要である点。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：本調査によってモンゴル語と日本語の属格主語認可の条件が明らかになったが、実は、アジアの他の言語（ウルドゥ語やベンガル語）なども、この新たに明確にされた認可条件からその属格主語の分布が説明できることが明らかになり、この認可条件は、人間言語に共通の知識であることが明らかになってきた点。

社会的意義：人間言語の属格主語の分布を本調査で詳しく行った結果、パキスタン、（内）モンゴル、バングラデシュ、日本における言語の属格主語の認可条件が同じであることが分かったことから、一般社会の人々に、人間言語の性質は、かなり類似しており、言語間の多様性は、実は、かなり限定されていることを示すことができた点。

研究成果の概要（英文）：This research investigated environments of genitive subject licensing in Mongolian, and showed (i) that scrambled NPs can license genitive subjects in Mongolian, (ii) that both Mongolian and Japanese obey the same conditions on genitive subject licensing, and the differences between the two languages arise from the environments in which the adnominal form of a predicate may appear, and (iii) that there are (at least) two types of languages in the world with respect to genitive subject licensing, namely, in languages like Chamorro, wh-agreement nominalizes a predicate, and the nominalized predicate licenses a genitive subject in the language, in languages like Mongolian, a genitive subject needs to be licensed by a nominalized predicate and a nominal element that locally c-commands it.

研究分野：言語学

キーワード：Mongolian genitive subject

1. 研究開始当初の背景

私は、過去7年に渡り、内モンゴル語コーチン方言母語話者で、言語学者の Lina Bao 博士(大阪大学で博士号を取得した後、現在、中国貴州省黔南自治州黔南民族師範学院において講師となっている)と長谷部めぐみ博士(横浜国立大学で博士号を取得した後、現在、信州大学全学教育機構において、非常勤講師となっている)とともに、モンゴル語のさまざまな統語現象(属格主語の分布、対格主語の分布、所有・再帰代名詞の分布、WH句の分布など)を綿密に調査してきたが、それ以降も、次から次へと、重要な言語現象に遭遇してきた。その中で、モンゴル語において、スクランプリングを受けた目的語名詞句が、属格の認可に関与している可能性があることを示すような例に遭遇した。日本語では、それに対応する文が、非文である。このことから、モンゴル語における属格主語認可の条件の解明と、日本語との差異は何に起因するのかを解明しようと思った。それが、本研究の背景である。

2. 研究の目的

理論言語学上、人間言語における格の分布とその認可条件の解明は、一貫して、重要な研究テーマとなってきた。とりわけ、日本語などの、関係節が名詞主要部に前置される言語においては、主語が、主格または属格を取ることができ、その属格主語の認可に関する条件に関して、これまで、様々な仮説が提示されてきた。具体的には、主要な仮説は二つある。一つは、Miyagawa (1993, 2011, 2012, 2013)による名詞認可仮説、もう一つは、Watanabe (1996)/Hiraiwa (2001)による連体形認可仮説である。名詞認可仮説においては、名詞が、また、連体形認可仮説においては、述語の連体形が、属格主語を認可していると考えられている。ところが、Maki et al (2010)は、モンゴル語において、極めて奇妙なデータを発見し、報告している。その例においては、関係節内の埋め込み文の中の主語が、属格として出現しており、また、その際、埋め込み文における述語は、連体形でなければならない。そして、上述したように、モンゴル語において、スクランプリングを受けた目的語名詞句が、属格の認可に関与している可能性があることを示すような例も存在するようである。

したがって、本調査の目的は、モンゴル語における属格主語認可条件を解明し、日本語との差異は何に起因するのかを解明することである。

このようなデータに基づく調査は、次の点において重要である。つまり、なぜ、属格主語の分布が、日本語とモンゴル語の間で、異なっているのか、また、日本語のデータに基づいて提案された属格主語の認可条件は、普遍的であるのか、日本語においてのみ適用するのか、という問いを提起するという点である。このような調査は、現時点では、Maki グループが主に行っているだけで、国内・国外における研究において、詳細になされていない。したがって、モンゴル語における属格主語認可条件の解明に関する研究は、国内・国外の研究において、その重要性は、明確であるものの、いまだに、不十分な調査段階であるという位置づけであり、これらを解明することは、理論言語学における原理とパラメーターの理論に重要な貢献をすると考えられる。

3. 研究の方法

本研究における主要調査(モンゴル語におけるスクランプリングによる属格主語認可の調査)に関して、これまでに構築した信頼関係から、Lina Bao 博士/長谷部めぐみ博士と共同で研究を進める。モンゴル語に関しては、Bao 博士の母語話者としての直感と、博士が接触できる他の母語話者からのアンケート調査をもとに研究を進める。得られたデータは、モンゴル語母語話者の Bao 博士、Shulun 氏、Yiliqi 氏、Wurigumula 氏とともに再確認し、各文が、文法的であるかどうかを吟味し、判断する。そのデータを、Bao 博士、長谷部博士、坂本祐太博士と確認し、それが言語理論に対して何を示唆するか議論する。

4. 研究成果

本調査では、モンゴル語における属格主語認可の環境を調査し、次の3点を明らかにした。第一に、スクランプリングによって左方向に移動を受けた名詞句が、その右手にある属格主語を認可できる点である。ただし、スクランプリングを受けた要素が、後置詞句である場合には、その右手にある属格主語を認可することができない。第二に、モンゴル語も日本語も、同じ二つの属格主語認可条件に従い、その二言語の相違は、述語の連体形が出現できる環境の相違に起因している点である。そして、第三に、世界の言語には、属格主語認可に関して(少なくとも)2種類の言語がある点。つまり、チャモロ語のような言語においては、疑問文形成によって生ずる一致によって、述語が名詞化され、この名詞化された述語が属格主語を認可するが、モンゴル語のような言語では、属格主語は、名詞化された述語とともに、名詞自体も必要である点である。

本研究の成果の学術的意義は、次の点である。つまり、本調査によってモンゴル語と日本語の属格主語認可の条件が明らかになったが、実は、アジアの他の言語(ウルドゥ語やベンガル語)なども、この新たに明確にされた認可条件からその属格主語の分布が説明できることが明らかになり、この認可条件は、人間言語に共通の知識であることが明らかになってきたという点であ

る。つまり、これらの言語においては、属格主語認可の条件は、名詞的要素か連体形的要素かのどちらかではなく、両者が、一体となって条件を構成しているということである。さらに、本研究の成果の社会的意義は、次の点である。つまり、人間言語の属格主語の分布を本調査で詳しく行った結果、パキスタン、(内)モンゴル、バングラデシュ、日本における言語の属格主語の認可条件が同じであることが分かったことから、一般社会の人々に、人間言語の性質は、かなり類似しており、言語間の多様性は、実は、かなり限定されていることを示すことができたという点である。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

- [1] Maki, Hideki, Lina Bao, Wurigumula Bao, and Megumi Hasebe (2016) “Scrambling and Genitive Subjects in Mongolian,” *English Linguistics* 33, 1-35.査読あり

〔学会発表〕(計2件)

- [1] Shulun, Hideki Maki, Lina Bao, Megumi Hasebe and Yuta Sakamoto (2018) “Leftward and Rightward Clause Movement in Mongolian,” *The 157th Meeting of the Linguistic Society of Japan*, Kyoto University, November 17, 2018.
- [2] Yiliqi, Hideki Maki, Lina Bao and Megumi Hasebe (2017) “Subjects of Stative Predicates in Prenominal Sentential Modifiers in Mongolian,” Poster Session. *The 155th Meeting of the Linguistic Society of Japan*. Ritsumeikan University, November 26, 2017.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<https://www1.gifu-u.ac.jp/~makijp/>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：ハウ・リナ、ショロン、イリチ、ウリグムラ、長谷部めぐみ、坂本祐太

ローマ字氏名：Lina Bao, Shulun, Yiliqi, Wurigumula, Megumi Hasebe, Yuta Sakamoto

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。